

## 仏教教育の意義 親鸞における三宝観の考察

The Significance of Buddhist Education : A Study on Shinran's View of the Three Treasures

松 山 智 道

Chido Matsuyama

(要 旨)

仏教教育の仏教的立場は、釈迦牟尼仏(釈尊)という歴史上のブツダの教えを学び、一人一人がひとえに成仏を目指す実践道である。その学びの内容とは、八正道であり、「七仏通戒の偈」に示された「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教(もろもろの悪を作すことなく、もろもろの善をつつしんで行い、みずからそのこころを浄める、これが諸仏の教えである)」である。しかし、親鸞はその学びの限界性を指摘し、阿弥陀仏の本願力による念仏成仏道を明らかにした。これが仏教教育の真宗的立場である。成仏を目指す親鸞は、「底下の凡愚」の人間観より、「仏宝」を阿弥陀仏、「法宝」を「念仏法」、「僧法」を「真の仏弟子」と位置付けるが、その厳粛な選びの内実に真宗の教育理念を学ぶことができる。

(キーワード) 仏教 教育 親鸞 三宝 三願

### はじめに

仏教とは、ブツダ(釈尊)の教えであるとともに、この私がブツダ(「真実に目覚めた者」)に成る教えでもある。釈尊は、三十五歳で悟りを得た後、五人の者に教えを説いたと言われている。「初転法輪」とも言われ、

ここに仏教教育の始点を見ることが出来る。つまり、教える者(「仏」)、教える内容(「法」)だけではなく、教えを受ける者、教えを学ぶ者、ブツダに成るべき者(「僧伽」)が誕生したのであった。いわゆる「仏法僧の三宝」と呼ばれているものであるが、この「仏法僧」の三宝が成立することこそがまさに仏教教育である。そして、「縁起」の教えから言えば、僧(「学ぶ者」)の誕生によって初めて、仏が仏として、法が法として成り立つのである。しかし、親鸞は「末法五濁の有情の行証かなわぬとかなれば 釈迦の遺法ことごとく 竜宮にいりたまいにき」と述べて、釈尊によって説かれた教え(「法」)を学び実践しようとしても、末法五濁の時代に生きる有情(「凡夫」)にとっては、その教えが教えとして成り立たないことを言及している。そして、親鸞は「ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道いま盛りなり<sup>2</sup>」、「念仏成仏これ真宗 万行諸善これ要門 権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ。」と明かし、仏教教育の究極的目標である「私がブツダに成る、成仏する」道(「証道」)は、阿弥陀仏による救済道であり、私が念仏の教えを学び実践することによって達成される、と述べている。ここに三宝の「阿弥陀仏」と「念仏の法」が見られ、さらに、念仏成仏道を正しく学び歩む者たちを親鸞は「真の仏弟子」と呼び、ここに親鸞

にとつての「僧宝」が示されている。

以上のような道筋において、本来の仏教教育のあり方を親鸞の念仏成仏思想より考察してみたい。

## 一、親鸞における「仏宝」

念仏成仏道における三宝の「仏宝」を「阿弥陀仏」と見るとき、親鸞において釈尊はどのような仏として位置づけられるのであろうか。

この点について信楽峻磨氏は次に述べられている。

親鸞においては、阿弥陀仏と釈迦仏の関係について、両者二尊を別立する立場においては、阿弥陀仏とは彼土成仏の仏であり、釈迦仏とは此土成仏の仏であると捉えて、両者が彼此に呼応して、われらを発遣招喚し、また慈悲の父母として、われらを調熟し、摂取しようというのである。

そしてまた、その両者二尊を統合する理解においては、その釈迦仏を中心とする立場からは、釈迦仏によつてこそ、よく阿弥陀仏の大悲は開示されたのであり、阿弥陀仏とは、釈迦仏によつてその命名されたのであるという論理をもつて両者を統一する発想がある。

そしてまたその逆に、阿弥陀仏を中心とする立場からは、彼土なる阿弥陀仏が、此土世俗に応現したものが釈迦仏であるという見方があり、より徹底的には、釈迦仏とは阿弥陀仏にほかならないといつて、釈迦仏をただちに阿弥陀仏に重層統一する理解までみられるのである<sup>1)</sup>。

この「釈迦仏とは阿弥陀仏」については、親鸞が「久遠実成阿弥陀仏五濁の凡愚をあわれみて 釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現す

る。」と述べるところに見られるのであるが、このように歴史上の人物を阿弥陀仏と重ねる発想は、親鸞の「阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ 化縁すでにつきぬれば 浄土にかえりたまいき。」にも見られるところである。ここでは源空（法然）が阿弥陀仏として語られている。法然は親鸞を念仏成仏道へ教え導いた師であるが、それは単なる師ではなく、親鸞にとつては阿弥陀仏であった。釈尊も法然も阿弥陀仏であればこそ、この私が仏に成る道を教え示されたのである、という親鸞の確信（真実信心）であったのである。

阿弥陀仏とは、釈尊が『無量寿経』において、法蔵菩薩が阿弥陀仏と成ると説かれているのであるが、親鸞は『一念多念文意』の中で、

一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりたまいて、無碍のちかいをおこしたまうをたねとして、阿弥陀仏となりたまうがゆえに、報身如来ともうすなり。これを尽十方無碍光仏となづけたまつれるなり。この如来を南無不可思議光仏ともうすなり。この如来を方便法身ともうすなり。方便ともうすは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまうをもうすなり。

と述べているように、親鸞における阿弥陀仏とは、究極的には「一如（真如）」であつて、それを私たちに教え示すために阿弥陀仏というかたちとなつているものであつた。

このように、親鸞における「仏法僧」の「仏」とは、「阿弥陀仏」であつて、その阿弥陀仏の「念仏の法」によつて私が教え育てられるものであつた。

## 二、親鸞における「法宝」

では、私が仏となる法、つまり阿弥陀仏による救済法とはいかなるものであろうか。親鸞は、「正法の時機とおもえども 底下の凡愚となれるみは 清浄真実のころなし 発菩提心いかせん。」と語り、自身を「底下の凡愚」と位置付けている。そしてまた、「大聖おのおのもろとにも 凡愚底下のつみびとを 逆悪もらさぬ誓願に 方便引入せしめけり。」と述べて、「底下の凡愚」が救われる道を述べている。この誓願こそが阿弥陀仏の誓願であり、『無量寿経』に説かれているところの救済法である。

『無量寿経』には阿弥陀仏の四十八願が説かれ、その願文はすべて「設我得仏」で始まり「不取正覚」で結ばれている。つまり、阿弥陀仏が阿弥陀仏となるためには、四十八の願いが実現されねばならないのである。それは先に述べたように、「三宝」に即して言うならば、真にその教えを受ける者が成り立つことにおいて、仏が仏として存在が成り立つのであった。そして、この四十八願の中で、第十八願、第十九願、第二十願こそが、「十方衆生」と呼びかけられている願であり、教えを受ける者がどのようなして仏となるか、その法が示されているのである。この三願を親鸞はどのように学んだのかと言えば、それは『教行証文類』に記された次のいわゆる「三願転入の文」と呼ばれている文言より知ることができる。

ここをもつて愚禿積の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依りて、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る。善本徳本の真門に回入して、偏に難思往生の心を発しき。しかるに、いまたに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。すみやかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲う。果遂の誓、良に由あるかな。ここに久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。

つまり、この文に出てくる「万行諸善の仮門」が第十九願の成仏道で

あり、「善本徳本の真門」が第二十願の成仏道であり、最終的に「願海に転入せり」と語られるものが第十八願の成仏道であった。この三つの願の内容、および三つの願の関連について、その詳細を述べることはしないが、結論から言えば、親鸞は『一念多念文意』において、

およそ八万四千の法門は、みなこれ浄土の方便の善なり。これを要門という。これを仮門と名づけた。この要門・仮門というは、すなはち『無量寿仏観経』一部にときたまえる定善・散善これなり。定善は十三観なり、散善は三福九品の諸善なり。これみな浄土方便の要門なり、これを仮門ともいう。この要門・仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらえて、本願一乗 円融無碍 眞実功德 大宝海におしえすすめいれたもうがゆえに、よろずの自力の善業をば、方便の門と申すなり。

と明かしているように、八万四千の法門、つまり釈尊一代の教えは、第十八願の成仏道に教えすすめ入れるための方便の成仏道であったのである。そして、「三願転入の文」によって語られているように、親鸞自身が方便の成仏道、自力による成仏道を歩まれたからこそ、他力（阿弥陀仏の本願力）による第十八願の成仏道が「底下の凡愚」の成仏道であったと見いだされたのであった。

仏教教育において、釈尊の教えを学ぶことは当然であるが、親鸞の視点に立つならば、それらはすべて阿弥陀仏の本願力に出遇うための学びとして必要なものであったのである。

このように親鸞においては、阿弥陀仏が説き示された「十方衆生」の三願によって、その選びの中で第十八願が「大宝海」であり、「法宝」であると明かされたのであった。

## 三、親鸞における「僧宝」

親鸞にとつての「僧宝」とはいかなるものか。まず想起されるのは「七高僧」である。親鸞が著した「正信偈」には、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空（法然）の七人から親鸞が学ばれた内容が記され、その結びには「唯可信斯高僧説（ただこの高僧の説を信ずべし）」<sup>12</sup>と述べられている。親鸞によって選ばれた「僧宝」である。それは当然、念仏成仏道を歩まれた方々であった。

さらに親鸞が明かす言葉には、「真の仏弟子」がある。『教行証文類』には、

真の仏弟子というは、真の言は偽に對し仮に對するなり。弟子とは釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり。この信行に由りてかならず大涅槃を超証すべきがゆえに、真の仏弟子という<sup>13</sup>。

と述べられている。先の七高僧も親鸞にとつては「真の仏弟子」であるが、ここで注目されるのは、「真の言は偽に對し仮に對するなり」の言葉である。信樂峻磨氏によれば、「仮の仏弟子とは、聖道教の人々と、浄土教の仮門、真門を生きる人々をいい、偽の仏弟子とは、非仏教的な外道を信奉する人々をいうわけです。そのことは、当時、すでに末法濁世の時代にあつて、行証の廢れた聖道教にいまなお固執する人々、本願の真意に徹しえずして、定散の自心に迷う浄土教の人々、さらにはまた、仏法を学ばないで、異教、邪道を奉持する人々が多かつたことによるものと思われま<sup>14</sup>」と説明されているが、親鸞における「僧宝」、つまり「真の仏弟子」とは、当然「偽の仏弟子」ではなく、「仮の仏弟子」でもないという選りであった。

そして、この「真の仏弟子」について信樂峻磨氏は、

親鸞は、そういう真の仏弟子になつたものには、二種の利益が身にそなわると、『無量寿經』に説かれる阿弥陀仏の四十八願の中の、第三十三願の文と、第三十四願の文を引いて、その利益について明かしております。

はじめの第三十三願の文は、「触光柔軟の願」と呼ばれるもので、阿弥陀仏の光明に触れ、その教法を学んで、真実の信心をえたものは、その利益として、身と心が柔らかくなるということです。このことは、真宗の念仏、信心に生きるものは、その人生において、いかなるできごとにも遭遇しても、つねに心が柔らかく、身も柔らかく、いかなる他人に對しても、いかなる状況においても、いつもその身を避けることなく、心を大きく開いて、他者を、またその状況を、よく受容することができるということの意味します<sup>15</sup>。

と述べられているが、ここに「真の仏弟子」の成長内容を見ることができ。つまり、親鸞が明かすところの「僧宝」とは、仏になるべき身としての確かな歩みを実現されるものであった。

それは先に述べた「法宝」としての「大宝海」について親鸞が、「大宝海」はよるずの善根功德みちきまを海にたとえたもう。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかにとくみちたりぬとしらしめんとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらすもとめざるに、功德の大宝その身にみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり<sup>16</sup>。

と述べているように、「法宝」と「僧宝」が即一して成り立っているのであった。

## まとめ

仏教教育とは成仏を目指すものではあるが、以上のように、私（および一切衆生）の成仏が実現されるものでなければ、仏教教育とはならない。それは、その成仏道を学ぶ者にとって、私における「仏法僧の三宝」が見い出されることもある。親鸞が明かす成仏道から教えられることは、選びが徹底されていることである。仏教系列学校での仏教行事では、三帰依文を唱和することが多いが、帰依三宝、つまり三宝に帰依することが仏教教育の根幹でもある。「帰依」とは「すぐれたものに対して自己の身心を投げ出して信奉すること」（『岩波 仏教辞典』）であり、絶対的信頼を意味する言葉である。その絶対的信頼の中身を厳しく吟味されたのが親鸞であった。親鸞が『教行証文類』の中で引用している善導の言葉に「自信教人信（自ら信じ、人を教えて信ぜしむる）」<sup>17</sup>とあるが、親鸞は自分の成仏道がいかにして成り立つか、その「仏法僧」の選びの中で親鸞自身が教え育てられ、それは同時に親鸞に関わる人々を教え育てることになったのである。ここに仏教教育の意義があるとともに、現代に生きる私においても、ブツダ（真実に目覚めた者）と成る道を学ぶということとは、つねに私にとっての「仏法僧」の選び、その内実が問われるのである。

註

- 1 『正像末法和讃』・『真宗高田派聖典』六三六頁
- 2 『教行証文類』・『真宗高田派聖典』四三五頁
- 3 『浄土和讃』・『真宗高田派聖典』五三五頁
- 4 信楽峻磨「親鸞における釈迦仏と弥陀仏」『日本仏教学会年報』第五十三号

- 5 『諸経意弥陀仏和讃』・『真宗高田派聖典』五四〇頁
- 6 『浄土高僧和讃』・『真宗高田派聖典』五七七頁
- 7 『一念多念文意』・『真宗高田派聖典』七二三頁
- 8 『正像末法和讃』・『真宗高田派聖典』五八二頁
- 9 『浄土和讃』・『真宗高田派聖典』五三七頁
- 10 『教行証文類』・『真宗高田派聖典』三八八頁
- 11 『一念多念文意』・『真宗高田派聖典』七一二頁
- 12 『教行証文類』・『真宗高田派聖典』二三〇頁
- 13 『教行証文類』・『真宗高田派聖典』二六六頁
- 14 信楽峻磨『教行証文類講義・第六卷』二〇六頁
- 15 信楽峻磨『真宗の大意』一九〇・一九一頁
- 16 『一念多念文意』・『真宗高田派聖典』七三四頁
- 17 善導『往生礼讃』・『真宗高田派聖典』二六九頁